

非認知能力の育成に向けて

令和6年度の小学校5・6年生を対象とした「小学生すくすくウォッチ」が返ってきました。このすくすくウォッチは、5年生では国語・算数・理科及び教科横断型問題、6年生では理科及び教科横断型問題の調査に加え、児童アンケートと教員アンケートを行っています。

DanaTex_{～架け橋～} VOL.3では、児童アンケート結果の分析、とりわけ非認知能力の分析について紹介したいと思います。小学校のデータですが、中学校にとっても参考となり得る内容ですので、今後の教育活動の参考にいただければ幸いです。

児童アンケート項目について

すくすくウォッチの児童アンケートは、普段の生活の様子だけでなく、大阪府教育庁では、「目標に向かって頑張る力」、「人と関わる力」、「気持ちをコントロールする力」を「未来に向かう力」(*)として非認知能力を定義し、これらの非認知能力についてアンケートによりその状況もたずねています。

《参考》(*)『乳幼児期に育みたい!未来に向かう力』リーフレットダウンロードページ

https://www.pref.osaka.lg.jp/documents/5937/hi-ninchi-web-bara_part2.pdf

非認知能力に関する質問項目の詳細や分析方法の補足説明については、通信最後の(参考)をご覧ください。

自己肯定感などの非認知能力の関係性についての相関分析^{補足説明(1)}

	自己肯定感	粘り強さ	ぶれない心	共感する力	相手の理解	切り替え	落ち着き	色々なことへの 興味や関心	自分の疑問に対する 答えを求める力
自己肯定感		0.450	0.081	0.211	0.244	0.296	-0.077	0.246	0.190
粘り強さ	0.450		0.187	0.336	0.450	0.455	0.018	0.467	0.433
ぶれない心	0.081	0.187		0.063	0.145	0.150	0.105	0.120	0.132
共感する力	0.211	0.336	0.063		0.450	0.324	-0.045	0.296	0.227
相手の理解	0.244	0.450	0.145	0.450		0.509	0.055	0.376	0.404
切り替え	0.296	0.455	0.150	0.324	0.509		0.125	0.309	0.359
落ち着き	-0.077	0.018	0.105	-0.045	0.055	0.125		-0.046	0.007
色々なことへの 興味や関心	0.246	0.467	0.120	0.296	0.376	0.309	-0.046		0.469
自分の疑問に対する 答えを求める力	0.190	0.433	0.132	0.227	0.404	0.359	0.007	0.469	

相関係数が高くなると、赤色を濃くしています。この分析から「粘り強さ」や「相手の理解」、「切り替え」は他の項目との関係が強いことがわかりました。

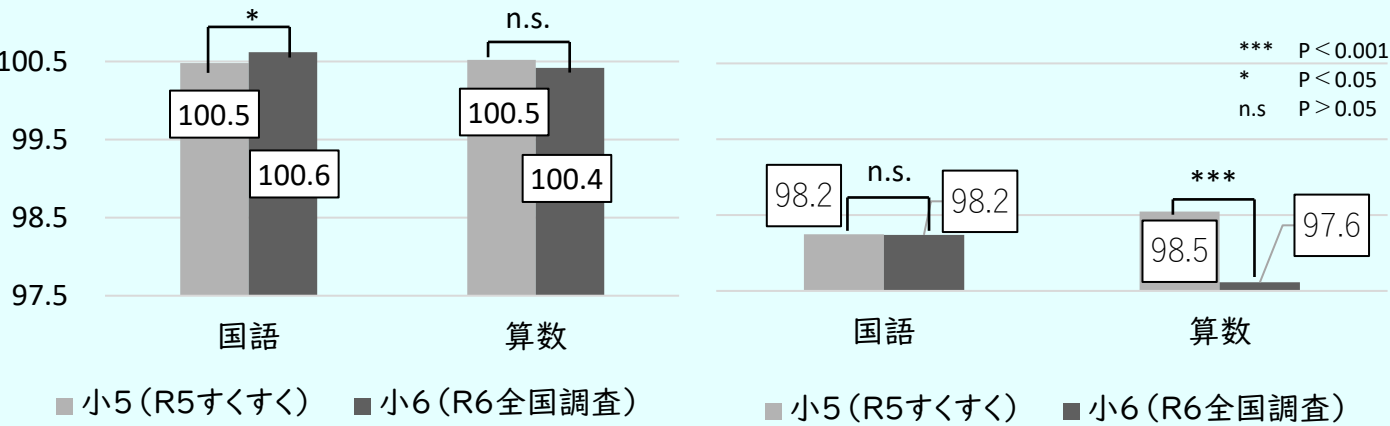
自己肯定感と非認知能力について

自己肯定感に関する項目「自分にはよいところがある」に関して、非認知能力や学力（認知能力）との関係性について分析を行いました。

分析1：前年度（小5）、自己肯定感の質問に対して肯定的に回答した児童と否定的に回答した児童の1年後（小6）の成績変化の違いについて

肯定的回答グループ（14550名）

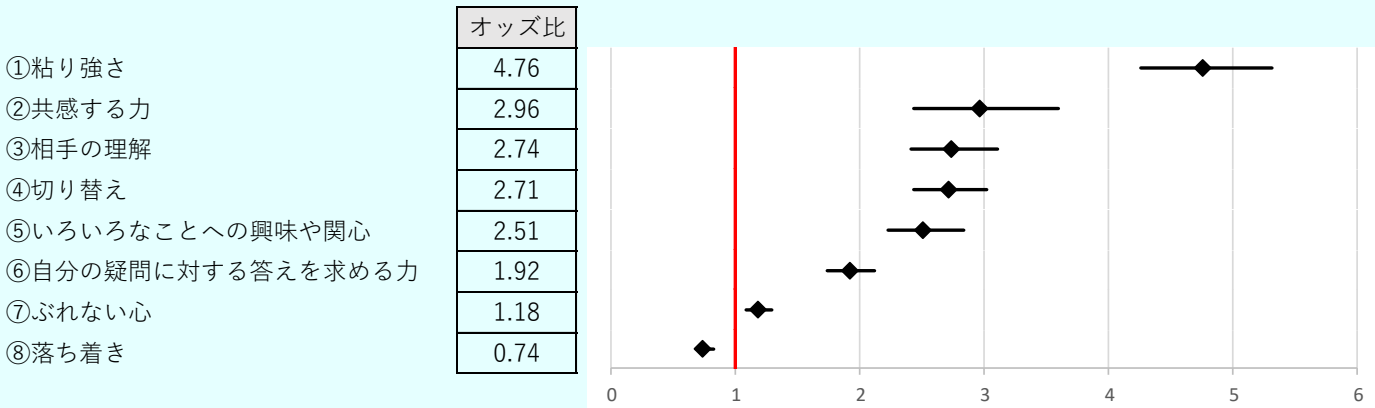
否定的回答グループ（2228名）



否定的に回答している児童は、肯定的に回答している児童と比較して成績の向上が見られていないことから、自己肯定感が将来の学力（認知能力）の獲得に影響していることが示唆されました。

分析2：今年度（小6）、自己肯定感に関する質問に対して肯定的に回答した児童と否定的に回答した児童の昨年度（小5）の非認知能力に関する肯定的回答割合の違いについて

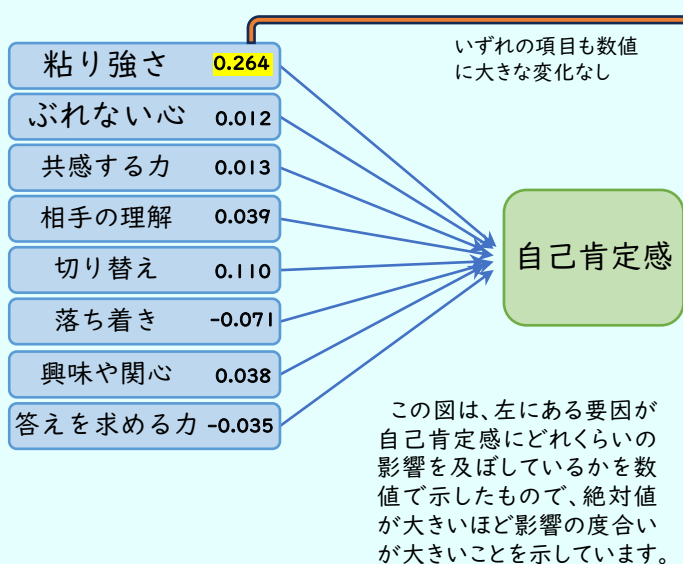
6年生時の自己肯定感に関する項目について、肯定的に回答したグループと否定的に回答したグループに分けて、5年生段階の非認知能力に違いがあるかどうかをオッズ比^{補足説明(2)}を用いて分析しました。



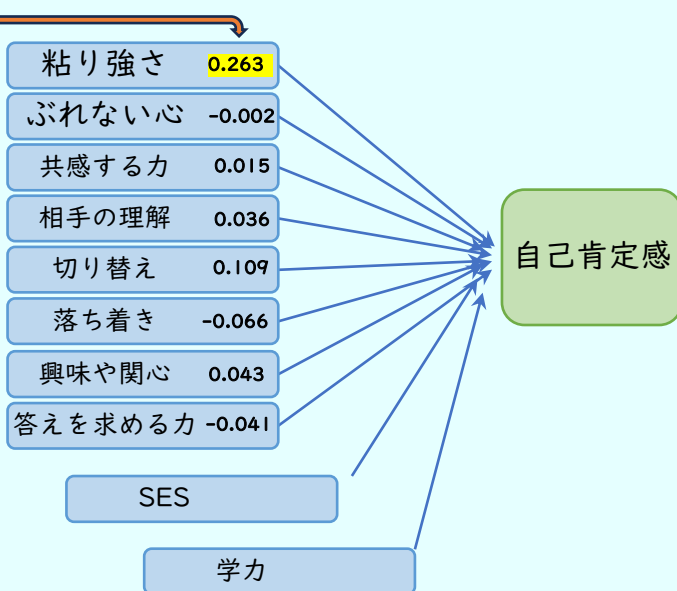
自己肯定感に関して肯定的に回答している児童は、「粘り強さ」や「共感する力」「相手の理解」が相対的に高いことがわかりました。

分析3: 自己肯定感と家庭の社会経済的背景 (SES) や学力との関係性について (重回帰分析^{補足説明(3)})

①非認知能力だけの場合



②①にSESや学力を入れた場合



自己肯定感は「粘り強さ」や「切り替え」の影響の度合いが相対的に高いことがわかりました。また①②いずれの分析結果についても、自己肯定感に影響を及ぼしている同じ項目の数値が大きく変化しないことから、自己肯定感に関してSESや学力が深刻な影響を与えている可能性が低いことが示唆されました。

分析1、2、3より、家庭の社会経済的背景や学力に関わらず、自己肯定感を高めるためには、「難しいことがあっても、あきらめない」や「何事にも一生懸命努力する」など「粘り強さ」が重要であることが示唆されました。

子どもたちの「粘り強さ」を高める指導は、どのようにすればよいでしょうか？

「頑張って取り組んだら達成できた」という経験が自信につながります。その自信が「もっと挑戦してみよう」という気持ちにつながり、好循環が起こります。そのためにも、先生方が一人一人の子どもの力を見取り、今ある力よりも若干高い課題を提示し、子どもたちが解決できた時に、しっかり認めることが大切だと考えます。頑張ったことを認めてもらえることで「次も頑張ろう」という気持ちになり、さらに高い課題にもチャレンジすることができ、それが「粘り強さ」につながると 생각합니다。

もし、頑張った結果うまくいかなかったとしても、頑張ったことや成長したことを認めることで、次につながると 생각합니다。すでに、実践されていることが、データ分析の中でも示唆された結果でした。

まとめ

今回は、すくすくウォッチの児童アンケートの結果(非認知能力)を中心に分析を行いました。今回の分析結果から非認知能力の中で「粘り強さ」がキーワードとして浮かび上がってきました。これは、中学生でも大切なことではないでしょうか。大阪らしい言葉でいうと「小さなことからコツコツと」なのでしょう。「粘り強い子どもを育てる」ためには、学校でどんな取組ができそうでしょうか。その取組が子どもたちの自己肯定感の向上や将来の学力に結びつくのではないのでしょうか。

(参考)小学生すくすくウォッチ 児童アンケートでの非認知能力に関する質問項目

令和6年度			
	項目名	質問番号	
目標に向かって頑張る力	粘り強さ	4	頑張りやである
		5	難しいことがあっても、あきらめない
		6	何事にも一生けんめい努力する
	ぶれない心	7	終わるまでに何か月もかかる計画に、最後までずっと興味を 持ち続けるのは難しい
		8	新しいアイデアや計画を思いつくと、前のアイデアや計画から 関心がなくなる
		9	物事に対して夢中になっても、しばらくするとすぐに飽きてしまう
人と関わる力	共感する力	10	悲しんでいる人を見ると、なぐさめたくなる
		11	人が頑張っているのを見たり聞いたりすると、応援したくなる
		12	まわりに困っている人がいると、早く解決するといいなあと思う
	相手の理解	13	自分と違う考え方の人と話しているとき、その人がどうして そのように考えているかをわかつてする
		14	人と対立しても、相手の考えや気持ちを理解しようと努力する
		15	人の話を聞くときは、その人が言いたいことは何かを考えながら 聞く
気持ちを コントロール する力	切り替え	16	自分の気持ちだけでなく、場面を考えて行動している
		17	休み時間と授業時間との気持ちの切りかえができる
		18	イライラを感じるときは、考え方を変えて落ち着いていられる ようにする
	落ち着き	19	自分の気持ちを態度や表情に出す
		20	つらい気持ちになることがあったときは、態度や表情に出す
		21	自分によいことがあったとき、その気持ちを態度に出さない
好奇心	色々なことへの興 味や関心	22	新しいことに挑戦することは好きだ
		23	誰もやったことのない物事にとても興味がある
		24	どこに行っても、新しい物事や経験を探す
	自分の疑問に対す る答えを求める力	25	はっきりした明快な答えが出るまでずっと考える
		26	予期しない出来事が起きたとき、原因がわかるまで調べる
		27	ある考えを理解するために、必要な知識をすべて学ばないと 満足できない

補足説明

- (1) 相関分析とは、ある量が増減すると何らかの因果関係によってもう一つの量が増減する関係について分析する方法で、今回の表の中の数値は相関係数を表します。相関係数は二つの量の関係の強さを表すもので、数値は1〜-1の間になり、絶対値が大きいほど関係が強いことを表します。一般的に絶対値が0.7以上を強い相関あり、絶対値0.7〜0.4を相関あり、絶対値0.4〜0.2を弱い相関あり、0.2以下を相関なしと考えます。
- (2) オッズ比とは、ある事象が起こりやすいかどうかを比較するときに使う方法です。今回の場合の「粘り強さ」の行について説明すると、粘り強さと6年生の時の自己肯定感には正の関連があり、その大きさが4.76である、ということになります。オッズ比を表した右のグラフは、オッズ比を◆で表し、◆につながっている直線は、「95%の確率でのオッズ比のとりうる範囲」を表しています。直線が「1」の線をまたいでいる場合は、どちらが高いとは言いがたく、差はないと考えます。
- (3) 重回帰分析の詳細については、VOL.1をご覧ください。